



宗 教 と 近 代 化

足 利 惇 氏

Religion and Modernization

Atsuuji Ashikaga

In the Southeast Asian and Middle Eastern countries where "Modernization" is taking place in a drastic way, the influence of religion in this process is stronger than we may think, because religion strictly regulates the way of life as well as the thinking of peoples.

Modernization is essentially a European concept. These countries which are now in the process of modernization apparently are not able to grasp the significance of the European experience in which scientific rationalism, as reflected in secularism, successfully took precedence over religion, which was reflected in traditionalism. Thus, the inevitability of the conflict between modernism and traditionalism escalating into one between secularism and religion, faces these developing nations. Although these nations are making efforts to bring modern elements into the lives of their people by means of modern secularized education, these efforts will make little headway. So long as the essential conflict between religion and secularism is not solved, the apparent modernization achieved will be superficial. Observations of such superficial changes in society are not to be taken as valid measures of modernization.

This paper proposes that, as in the case of Japan where religion played a comparatively small role in guiding people's lives, secularism apparently helps the people to accept modern concepts and to accelerate the process of modernization.

Iran and Thailand have been used as examples to show how deeply imbedded religious traditions retard this process. In Iran, Zoroastrianism, at a point in its development when it stressed traditional, national concepts, had been superimposed upon its Islam, a nascent religion then more international in character. Despite the influences of Islam, the premodern characteristics, that is, the nationalism and traditionalism, are still basic concepts which prevail upon the lives of the Iranian people. In Thailand, it is the highly sophisticated Buddhist religion, superimposed upon indigenous animism. Thus, because religion is so deeply embedded, such nations as Iran and Thailand, will meet unfathomable difficulties in their transforming the social character of their people.

1. 近代化とその問題点

本大学人文科学研究所の吉田光邦君が「西南アジア研究、第13巻」に「乾燥と湿潤と——文明論的に——」という論稿を載せられ、その末尾に「……現代の科学技術は人間のあり方すら変えてゆこうとしている。近代化、すなわち現代の科学技術をフロンティアとする波は、もはや壮大な土木機械の活躍による単なる自然環境の改変にとどまらない。それは人間さえも変えてゆく。とすればこのアジアに存在する湿潤と乾燥という二極的な世界は、こんごどのような文明の様相を示すことになるだろうか。……」と結んで居られるが、これは昨年9月から12月にわたって乾燥地帯の Iran と湿潤地帯の Thailand 両国を踏査旅行をする機会を持った私にとって、きわめて示唆に富んだ彼の意見として敬意を払うわけである。私は吉田君自身の専門的立場からとられた立論についてとやかくいべき筋合ではないが、私は私なりに温帯地域を含めた湿潤地帯と乾燥地帯のぼう大な地帯を擁するアジアの近代化についてかねてから多少の意見を持ちつづけているものとして、ことにこのたびの Thailand 旅行の結果身にしみて感じたことを述べて見たいと思う。

私は、結論的にいって、欧米的な近代化がそう簡単に完成の形において僅日月の間にアジアにおいて成功するであろうか、かりに成功の域に近づき得るにしても多少の変形が許容されねばならず、しかも相当長い期間を要するであろう、と確信するわけで、この立場はわが国でも例外ではないはずであるといい得るわけである。地理的条件や気候的条件については、それがたとえ支配的といっても、文明の進歩はそれらを超えてある程度改変乃至緩和することも可能であろう。また機械文明的技術によって多くの人々にかつては彼らに未知であった物質的恩恵を与えることも帰結的には当然と考えられる。私は昭和9年から10年にかけて10カ月間、今日のIran当時の Persia に滞在し、主として同地域の言語について研究する機会があったが、このたびの再度の Iran 訪問で、30年前の当時と比較してはるかに近代化されていることに驚異の眼をもって観ることが出来た。全国の大都市をつなぐ主要道路の整備と舗装、ダムの建設による発電および灌漑への利用等々、古代中世以来の交通輸送は自動車の発達によって面目一新し、上古以来のこの地域の動力や農地改良に一大革命を与えつつあるのが認められた。またとくに首都 Teheran の変貌はすさまじい。高層建造物の林立、高級ホテルや娯楽設備など欧米なみといっても過言でない。帝国とはいいいながら両院制の議会があり、議員たちの選挙方法も先進国なみである。大学を始めとする教育機関は先帝 Reza-Shāh 時代よりはるかに普遍化せられ充実されているのはたしかである。銀行を主幹とする金融機関も漸次国内に分布し、かつては Bazar を中心とするこの地方の商業取引もはなはだ緩慢ではあるが近代化の方向に向っていた。近代国家的体制が確立されつつあることは我々がこれを率直に認めても差支えないものと思う。しかし、Iran のこの近代化への指向をもって直ちに Iran が近代国家に変化し得たと

はいい得ない。近代化にたいする後進性は先進国家に対して依然として相当の距離があり、そこには運命にも似た否定的素因すら感ぜられるほどである。このことは Thailand についても同様であって、政府の近代化への努力は十分に買い得るにしても、その現時点にたいしては自分としてそう簡単に甘い点をつけがたいものと考えられる。なぜなら全体的に見るとき、人間および彼らの構成する社会の基底は Iran においては30年以前とほとんど変わっていないというのが実情で、近代化への準備にたいする国民の自覚は必ずしも十分とは受取られないと見てまず差支えないからである。

2. イランにおける思想的変革の歴史

率直に言って Asia におけるこれら2国の近代化を考える場合、その促進を積極的に拒否してはいないにしても、それを遅延させ阻害している諸条件のいくつかが、如何なる点に伏しているか、これを見極める必要がある。多数の民族や人種を内包している国家の社会的条件は複雑で、それ自体国内問題としてもその解決はそう簡単なものではない。そして彼らのかかる社会的生活にとにかく一応の統一性を与えているものは宗教の役割であるが、この宗教がこれらの国家の近代化促進によい条件となっているかどうかの疑問もなかなか見逃せない問題である。Iran 人が Iran 高原に定着する以前には、同じく北方から移動して来た Arya 人と同祖関係にあることは人々もよく知るところであって、今さらここに事細かに説く必要もないが、彼らの移動は決して一回限りのものではなく数度の波によって行われていったことを忘れてはならない。彼らの移動と定着とはもちろんだいたい有史以前のことはあるが、彼らが移動と定着とに成功した物的条件は種々考察せられたところであり、その移動の仕方も今日の遊牧民に見る形式と本質的にはさほど変わったものではないと考えられている。彼らの持っていた宗教思想が自然崇拜乃至信仰の類に近かったことは、今日我々の手に残存しているインドの Veda 讃歌や Zoroaster 教の Avesta 聖典の一部をなす Yasht 章のうちに十分に認めることが出来る。ただ古代 Iran の代表的宗教として一般に知られているこの Zoroaster 教が実は西紀前6世紀頃に Persia に在住した教祖 Zoroaster がかの Arya 的自然崇拜の宗教を改革して生じたものであったことは注意すべきことで、この教祖の偉大な功績を一言にしていえば、彼がかの原始宗教から善悪の倫理性を抽出し教理の基本としたところにあるといって過言ではない。もちろん、Zoroaster 教はその宗教自身についても教義上の発展はあったが、この宗教を国教とした中世の雄邦 Sasan 王朝の Persia 帝国は、Islam の征服によって、Iran 民族はかの宗教思想を棄却して Sem 系の Islam 教によって新生し、今日の Iran 民族の大部分が Islam 教をもって生活や思想の上の根拠となし社会においてきわめて強固な紐帯たらしめているのが実状である。我々は Iran が民族的な原始宗教からほとんど別個とも見られる national な Zoroaster 教を捨てて結局は mondial 乃至 international な Islam 教を迎え、国民文化

の太宗たらしめるに到ったことは、政治的条件は別として当時の精神的近代化に一步を進め得たものと受取って差支えないものと思う。かかる Iran の思想的革命の歴史にたいし Thai 人はどうであったであろうか。

3. タイ民族の思想的系譜

広義の Thai 民族についての論議はさておき、今日の Thai 人が古来 Indo-China 半島に行われた多くの民族移動のうち、最後に定着した新しい民族であることは人の知るところである。彼らの祖先が揚子江以南に居住していた中国古代史のいう南蛮の一部であったことは疑いないところであるが、この民族がmonsoon地帯の水稲犁耕の民族であることは、彼らの文化形成の性格を決定する本質的なものとして十分に留意せらるべきことである。彼らは南下の途上、かの Ankor Wat の遺跡でその盛時をしのび得る Mon-khmer 語族をも吸収しつつ、最後に彼らが Siam 湾近くの平原に到達したのは西紀13世紀であり、これは Iran の Arya 民族の場合に比してきわめて後代であり、時代的には比較的新しいのが注目せられる。しかし、彼らが人種的にも言語的にも中国と同種であることは、中国文化の圏内の民族として、華南出発以来今日に到った南下の途上政治的活動もしばしば中国史に現われている。南紹とか大理とかはその例である。彼らのうち安南山脈を境とし、その西側の Thai 族は仏教徒としてインド文化の影響を受けている。Indo-China 半島の名称が文字通り地理的だけではなく文化的にもその性格を表現していることは興味が深い。

今日の Thailand が仏教国の一方の旗頭であることは何人も認めるところであるが、その仏教は小乗系の南方仏教であり、仏教活動が如実に行われている地方である。小乗仏教が Thailand に着実に布教され始めたのは Burma の Anawratha 王が Thaton を占領し、首都を Pagan に移して以後ということになっているから、どんなに溯っても西紀11世紀の中葉以後のことである。仏教はインドの national な性格を持つ Brahmanism から離脱し、精神的止揚により世界宗教すなわち international な宗教として誕生成立したが、Thailand は最初からこの高度の世界宗教に出会い、Iran に見るような民族的宗教の媒介なしに仏教の思想を享受し、彼らの思想と生活の規範をそこに求めたことが注目せられる。もちろん仏教流伝以前の Thailand にたとえ原始的なものにせよ宗教的なものがないわけではなかった。かく考えられる一つの証拠は、我々が Thailand の仏教寺院を訪れる時、その境内にある菩提樹や門のかたわらに小さな祠があり、また農村などに行くと同様な祠が民家の中庭の隅などにあるのに気づく。それらの小祠に死者の霊(phi)や地祇を祭り、その精霊を祭ることからその禍の来ることを免れんことを願う宗教的風習は、恐らく仏教流入以前に Thailand の原住民によって行われていた原始宗教の名残りと考えて差支えないであろう。今日なおかかる animism 的信仰は北部 Thailand の民族中に行われ、彼らの中に仏教が浸透して行く姿は、その間の事情をよ

く説明するものと考えられる。Iran においては Islam 侵入以前の Persia 人がすでに相当高度の宗教的体験を持っていたのに対し、Thailand の人民がその定着の時期とほとんど時を同じくしてすでに思想的には一種の脱皮をとげていた仏教に同化されたことは、対照的に見てきわめて興味深い。

4. 結 び

Iran にしても Thailand にしても宗教の力はわが国で考えている以上に強烈で、彼らの日常生活がすべて宗教によって律せられ、少なくとも表面的にはその宗教的戒律が厳守せられている。信仰さえあれば戒律に反しても看過してかまわぬというような宗教者は、世間的に許されないし、また彼らの宗教主義として考えられぬことである。近代の科学がヨーロッパの中世以来宗教と対決しつつ現代にたどりついた人類の歴史とそれ自体の解決とは、Islam や仏教の世界においては全く与り知らなかった事実で、物質文化をも含めたかかる近代的精神にたいして両国が今一度彼ら自体の宗教に遅かれ早かれ対決しなければならない運命にあることは、彼らの名実ともに近代国家としての脱皮に不可避的な問題と考えられる。しかし両国においてこの問題にたいして無準備ではない。それは宗教を離れた近代教育によって近代精神の国民への滲透を計っているわけであるが、その効果が現われるのには長年月を要するわけで、わが国の例を見ても明らかであろう。両国の近代化の問題から類推せられるアジアの近代化の進行速度の鈍化の傾向が現われ始めるならば、実はかかるきわめて本質的な問題を内部に抱えているわけであって、単に外面的な紛飾をもって近代化と見ることは浅見である。Islam 教にしても Thailand の仏教にしても、その戒律がきわめて重要な宗教的内容と主張せられていることに十分注意すべきである。わが国は仏教国とはいえ、近世以来の精神が必ずしも仏教に支えられて来たとはいいい難く、かかる意味の非宗教性は却って近代的精神を率直に受容し、近代化の速度を迅速ならしめた有力な一因とも考えられるが、この点 Iran にしても Thailand にしても、それが強固な宗教国なるが故に、国民自体の精神的転換は決して容易なものとはいいい難いというのが私の意見である。